

小学校部活動の地域移行の 成果と課題

◎ 中野 貴博 (中京大学)
小磯 透 (中京大学)
後藤 晃伸 (中京大学)



背景・目的

【学校部活動の地域移行に関する提言（スポーツ庁）】

- 子どもがスポーツに継続して親しむことができる機会の確保
- 運動部活動の教育的意義や役割を継承・発展
- 地域全体で子供たちの多様なスポーツの体験機会を確保
- 専門性等を備えた指導者やふさわしい施設の確保
- 適正な活動時間の中で生徒の複数種目参加などの多様な活動の提供

【子どもの発育発達や地域の現状】

- 子どもの発育発達や運動発達を考えれば、小学校の部活動から地域移行の体制を整え、連続的に中学校部活動を実施できることが理想
- 中学校部活動がほぼ全校実施。一方、ほとんどの小学校に部活動がある市町村は13.3%（青柳ら，2018）しかない
- A県では、N市の全校実施を始め、多くの市町村において高い割合で小学校部活動が存在する。
- A県、N市では、2020年度より先駆的に小学校部活動の地域移行開始

背景・目的

【A県N市の取り組み】

小学校を対象に、前述のスポーツ庁の提言に沿った部活動改革を実行

- 1) 指導者の数を確保するための地域住民の活用
- 2) 質を確保するための研修制度の充実
- 3) 子どもの多様な運動機会を確保するための多項目実施

➡ 保護者や児童が改革をどのように受け止め、どのような成果や課題が見られるかを検証 ⇒ 今後の改革への大きな指針

目的

部活動の地域移行を進める地域において、改革に対する保護者、児童の認識および、取り組みの成果と課題を検討することを目的とした。

- 実情と課題 ➡ 部活動の地域移行への理解と参加状況
- 成果 ➡ 参加状況×運動時間、習い事、GRITスコアとの関係

調査対象

(調査対象)

愛知県N市の公立小学校16校に通う4～6年生3446名を対象に質問紙調査を実施した。本調査研究への同意が得られた2254名(65.4%)を有効回答とし、性別が明示されている計2162名(62.7%)を分析対象とした。

表1. 対象者の性・学年別内訳

	4年生	5年生	6年生	合計
男子	390	358	355	1103
女子	361	367	331	1059
合計	751	725	686	2162

調査項目（分析項目）

（運動行動および体力自己評価）

9つの大問からなる質問紙を作成。その内、本研究では、以下の内容に関連する項目について分析検討を行った。また、調査の冒頭には、調査に関する説明文書を付し、調査の回答への同意を得た。

- 小学校部活動改革の認識
- 参加状況
- 活動に対する感想
- 不参加の理由
- 児童の運動習慣
- 習い事実施
- Short GRIT尺度（8項目）（西川ら、2015；山北ら、2018）

分析方法

【部活動の地域移行への理解と参加状況】

1. 部活動の地域移行への理解

- 「部活動が地域移行したことを知っているか」を単純集計
- 選択肢で示した、主な改革内容について知っているかを単純集計

2. 部活動への参加状況と参加種目数

- 現行の部活動に「参加しているか」、また、「何種目実施しているか」を性・学年別にクロス集計

3. 現行の部活動実施体制に関する感想

- 子ども、保護者、別々に各選択肢に対して「とても良い」「まあ良い」の回答割合の合計を算出して比較

4. 部活動に不参加の理由（参考データ）

- 部活動に参加していない児童を対象に、参加していない理由を集計
- 「体制や運営の仕方に不安がある」には注意

分析方法

【部活動への参加状況と運動時間，習い事，GRITスコアとの関係】

1. 部活動への参加・不参加による運動時間（体育授業以外）の差

- 平日・週末に分けて，平均値の差を検定 ⇒ 対応のないt検定

2. 部活動への参加・不参加と習いごと実施の関係

- 「運動系の習い事」「運動系以外の習い事」「学習塾」に分類して質問。各習い事の実施率の差を検定 ⇒ 対応のないt検定

3. 部活動への参加・不参加によるGRITスコアの差

- Short GRIT尺度には逆転項目を含んでいるため，評価値を逆転させる
- GRITスコアの算出：以下の8項目の単純和の算出
 1. 頑張りやである，2. 始めたことは何であれやり遂げる
 3. 困難にめげない，4. 勤勉である
 5. いったん目標を決めてから，後になって別の目標に変えることがよくある
 6. 物事に対して夢中になっても，しばらくするとすぐに飽きてしまう
 7. 新しいアイデアや計画を思いつくと，以前の計画から関心がそれる
 8. 終わるまでに何カ月もかかる計画にずっと興味を持ち続けるのは難しい
- 全学年および各学年で，部活動参加・不参加によるGRITスコアの平均値の差を検定 ⇒ 対応のないt検定

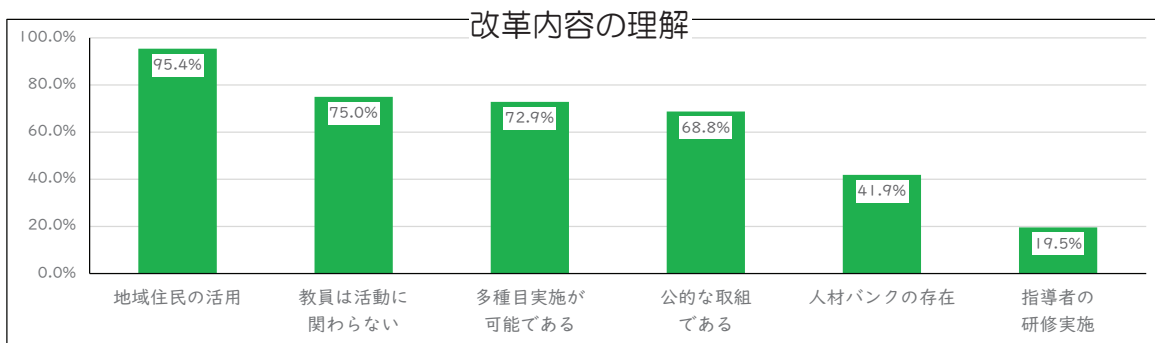
結果（部活動の地域移行への理解）

☆部活動改革の認知・理解☆

●改革があったことを知っているか？

		知っている	聞いたことはあるがよく知らない	知らない
性別	男子	83.8%	12.5%	3.7%
	女子	81.6%	14.1%	4.3%
学年別	4年生	79.3%	14.4%	6.3%
	5年生	86.0%	10.8%	3.2%
	6年生	82.9%	14.6%	2.5%
	合計	82.7%	13.3%	4.0%

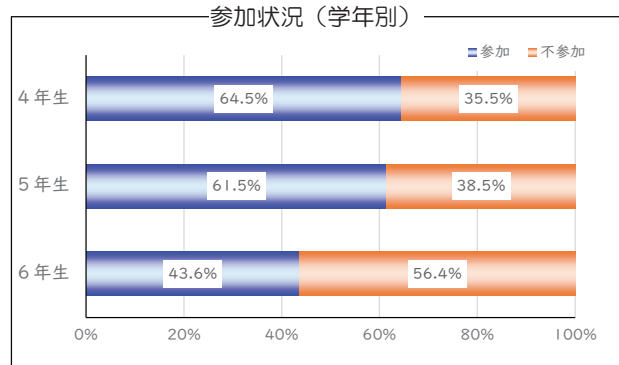
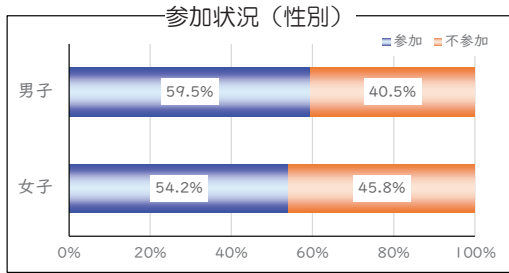
χ^2 検定：性別 n.s., 学年別 $p < 0.05$



地域移行の認知度は約8割と高かったが，改革内容に関しては，人材バンクや指導者の研修実施などの認知度が低く，どういう人が，どういう知識のもとに指導をしているかの周知が不足している。結果的に指導者の質への不安につながっているのでは。

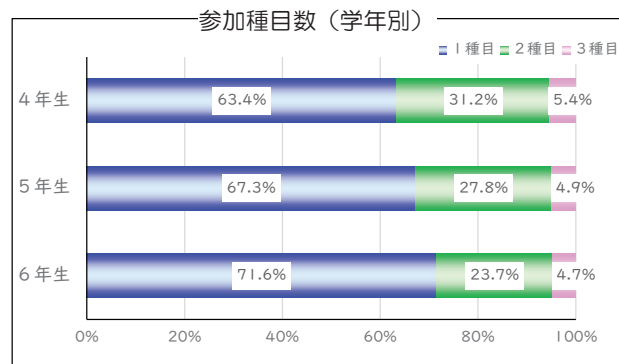
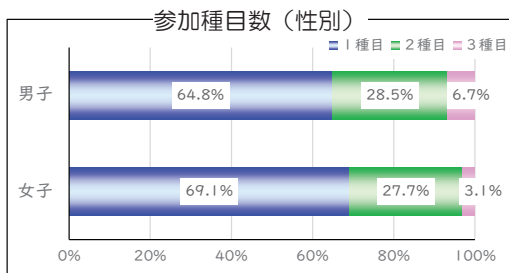
結果（参加状況）

☆部活動への参加状況☆



改革以前の参加延べ数：42522人
改革後の参加延べ数：55818人

☆参加者の参加種目数☆



結果（参加状況）

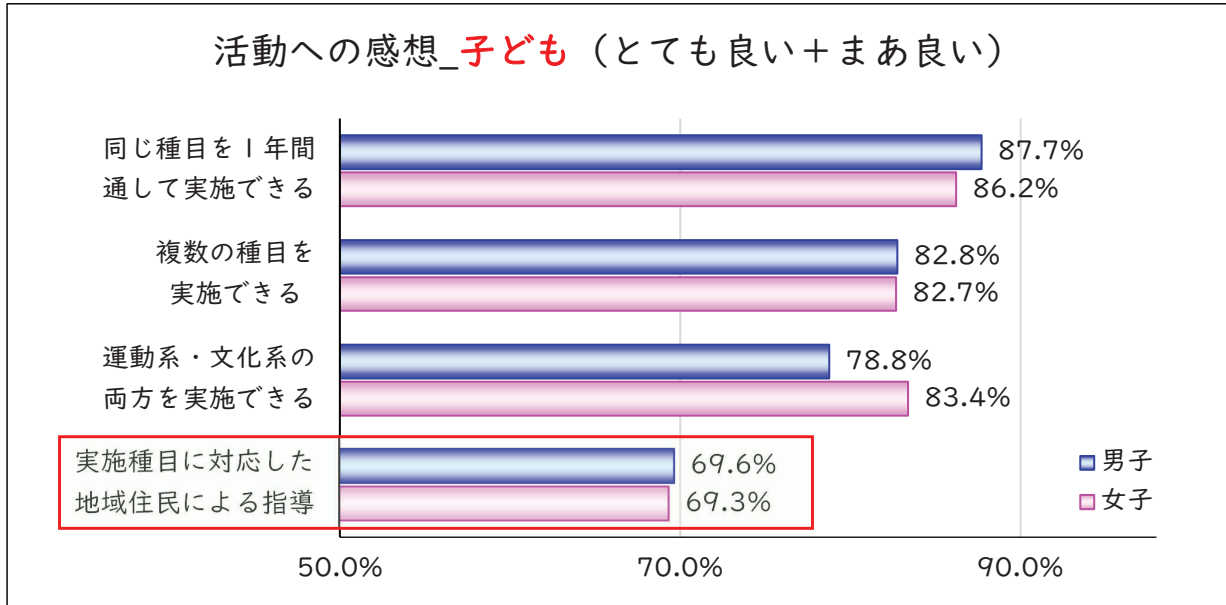
☆部活動への参加状況☆

参加状況は6割弱であり，男児の方が若干多く，学年が進むに連れて減少する傾向がある。また，地域移行以前と参加者の延べ数を比較すると増加傾向である。

改革の特徴である，複数種目実施可能な体制に関しては，現状，3種目実施している児童の割合は少なく，そのメリットやコンセプトをしっかりと伝えていく必要がある。

結果（地域移行の感想：子ども）

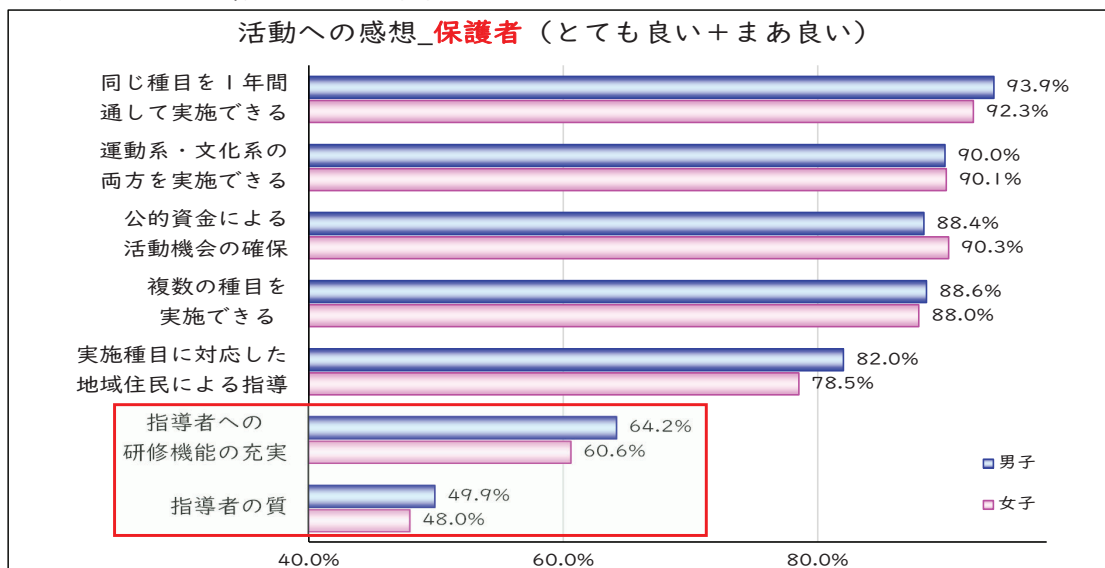
☆部活動の地域移行に対する子どもの感想☆



子ども自身の反応は、概ね良好である。指導者が教員から地域住民等になったことは7割程度は肯定的に受け入れているが、残りの3割の感じている問題点をしっかり探り、解消する必要がある。

結果（地域移行の感想：保護者）

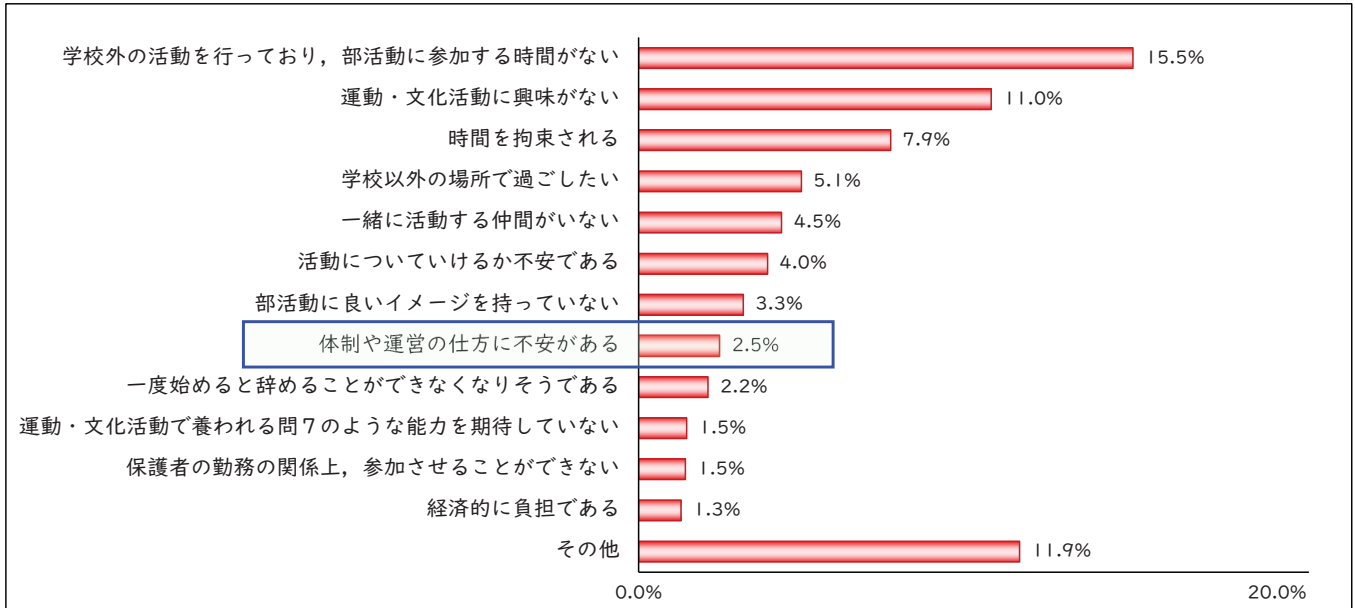
☆部活動の地域移行に対する子どもの感想☆



保護者の反応も概ね良好である。しかし、研修機能の充実であったり、指導者の質への満足度は必ずしも高くない。教員が指導をしていた当時のイメージがあると思われるが、指導者の質を高めること、そして、地域住民等が指導にあたることのメリットなども、しっかり伝えていくことで、保護者の了解も得られ易くなり、子どもの参加増も期待できるのではないかと。

結果（不参加の理由）

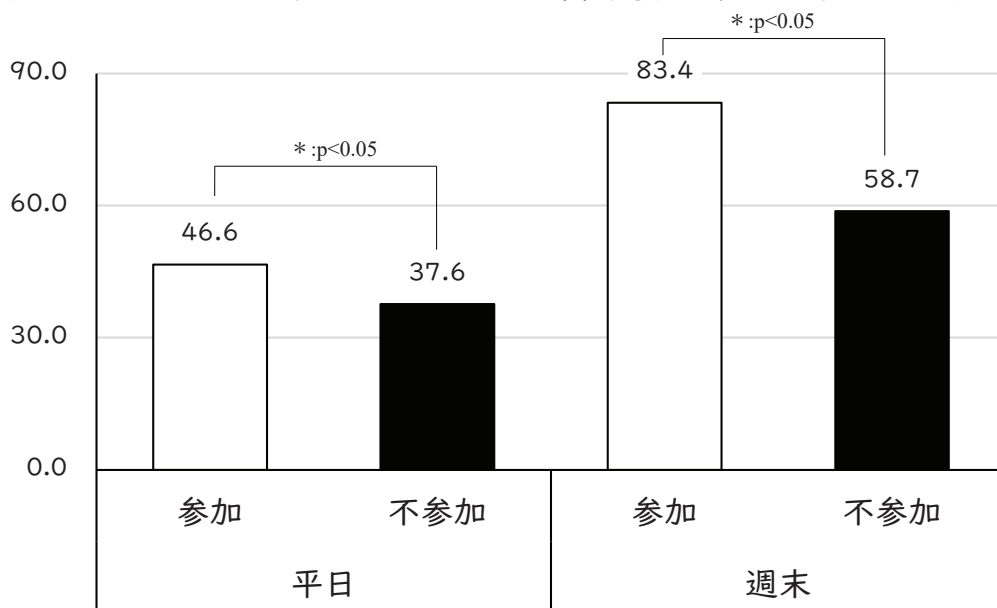
☆部活動に不参加の理由☆



部活動が地域移行したことにより、体制や運営の仕方に不安があると回答したのは、わずか2.5%であった。

結果（参加状況×運動時間）

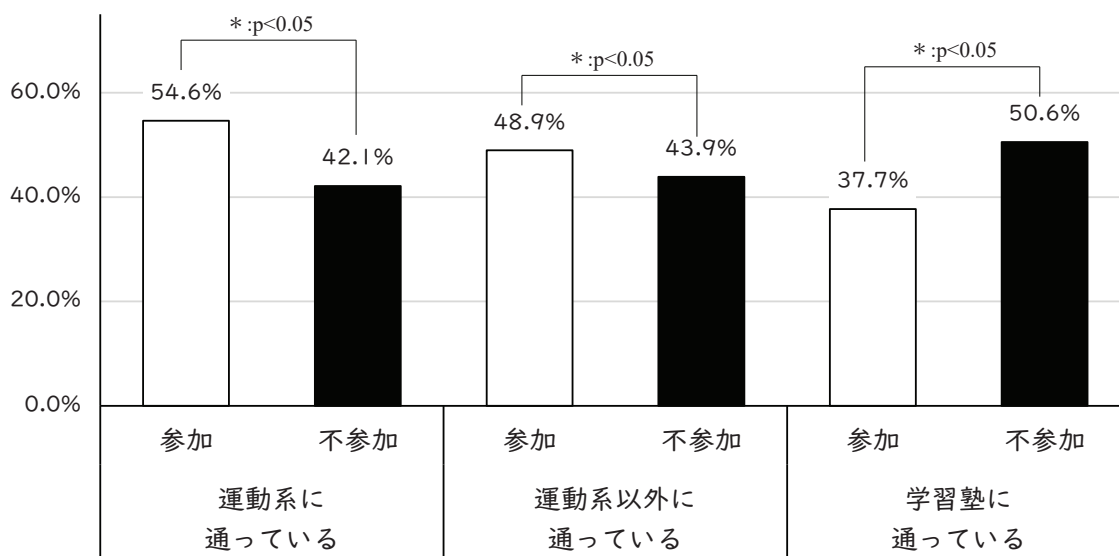
☆部活動への参加・不参加による体育授業以外の運動時間の差☆



体育授業以外の運動時間は、部活動参加児童において平日、週末とも有意に長かった。特に、週末は部活動が実施されていないにもかかわらず、有意に長くなっており、部活動参加が、運動習慣獲得に多少なりとも貢献している可能性がある。

結果（参加状況×習い事）

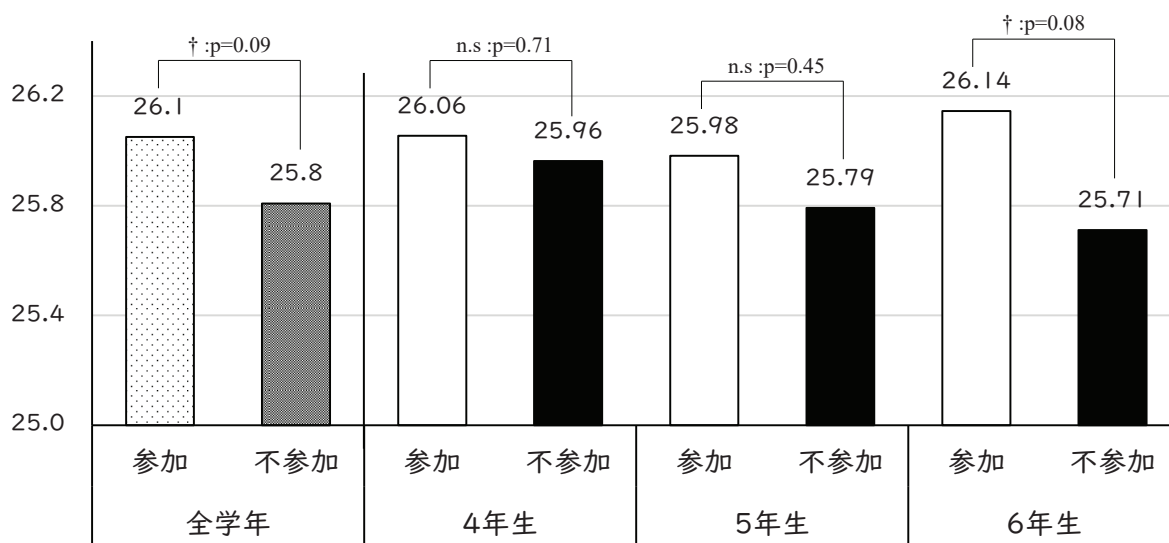
☆部活動への参加・不参加と習いごと実施の関係☆



習い事実施に関しては、実施児童の方が部活動への参加率が有意に高くなっていたが、学習塾に関しては逆の傾向であった。運動系や文化系の習い事実施者は、習い事実施が部活動参加の阻害要因にはなっていないと推察される。そのため、不参加の理由で見られた学外活動の中身は学習塾である可能性が考えられた。

結果（参加状況×GRITスコア）

☆部活動への参加・不参加によるGRITスコアの差☆



部活動参加児童の方が、GRITスコアが高くなっていた（有意傾向）。特に、学年が進むに連れて、その傾向は強まっており、継続的な実施がGRITスコアの向上に寄与することが示唆された。

まとめ

部活動の地域移行は、概ね好意的に受け入れられていることが確認された。一方、指導者の質に関しては課題も見られ、今後、研修制度の充実などが求められる。また、活動自体は運動習慣やGRITに改善傾向も見られるなど、地域住民を主体とした指導体制であっても、継続的な取組により社会、教育的な効果も期待できることが示唆された。